

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4271401517		
法人名	有限会社 さくらの里		
事業所名	グループホーム さくらの里		
所在地	〒859-1505 長崎県南島原市深江町戊3135-15		
自己評価作成日	平成22年2月15日	評価結果市町村受理日	平成22年4月5日

事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://ngs-kaigo-kohyo.jp/">http://ngs-kaigo-kohyo.jp/</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ローカルネット日本福祉医療評価支援機構		
所在地	〒855-0801 長崎県島原市高島2丁目7217 島原商工会議所1階		
訪問調査日	平成22年3月11日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

さくらの里は定員6人なので、チームワークをアップし、みんなで和気藹々とした生活を送りたい。
---

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

南島原市深江町の雲仙岳の麓に位置し、ホームにいながらにして美しい桜を眺めることもできる自然環境の豊かな静かな場所にあるグループホームさくらの里は、元々ペンションであった建物をホームとして使用されており、代表者夫婦は1階に住まれている。外部評価に対して、「ありのままをみてもらいたい」「ホームの現状を評価調査員と共に知り、少しでも改善に繋げたい」とたいへん前向きに捉え、今後のさらなるレベルアップを目指していきたいとしている。利用者との関わりについて、相手をよく知り、その人にとって何が一番大切か、何を必要としているか「心」を受け止めるために、ケアにあたる全ての職員が心を磨くことが大切であると強く感じられている。相手の喜びを自分の喜びと受け止められるよう、今後はさらに日々のサービスの質の向上とともに職員同士のチームワークもレベルアップをはかりたいとしている。
--

## ・サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) 項目 1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 該当するものに印	項目	取り組みの成果 該当するものに印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

## 自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキ-) + (Enterキ-)です。〕

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>理念に基づく運営</b>					
1	(1)	理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「すべては利用者のために。生活の活性化と、その先にある生きていることの満足感の提供」を理念としているが、従業者9人全員が必ずしも実践につなげているとは言えない。1～2名に馴れが見える。	職員の意見をもとに代表者が考えられたホーム理念は、毎日が楽しく過ごせるよう、今日一日がよかったと思えるように利用者のためにサービス提供を行うことを大切にしている。	
2	(2)	事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	小学校の行事には招待があり、参加している。施設の行事には、近所の人を招き一緒に楽しんでいる。クリスマスには、深江フランチム13人とライオンズクラブの訪問もあり。消防訓練に、地元消防団の参加有り。	盛んな地域との日常的な交流がある。地区の小学校へは運動会、学習発表会、餅つき等への参加のお誘いがある。また、両隣に住む方を食事に誘い、その方からの野菜や花のおすそわけもある。来年度は代表者が自治会の副会長を担う予定であり、今後も楽しみである。	
3		事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	2ヶ月に1回程度近所の独り暮らしの高齢者の方を招待して食事をし、入居者との交流を通じて地域に貢献を図っている。		
4	(3)	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	施設にとって、どんなにマイナスのイメージを持たれようが、全てをあからさまにし、理念実践のために従業者一人一人の質の向上につなげていこうとしている。	年に6回開催している運営推進会議は、外部から広域圏の職員、民生委員、老人会副会長等を招き、質の確保、参加者との改善課題を話し合いたいへん良い機会と捉え、毎回約2時間にわたりさまざまな議題を考え活発に話し合いが行われている。	
5	(4)	市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	広域や南島原市とは、必要な時に連絡を取り、運営推進会議にも参加してもらっている。また、インフルエンザの時は密に連絡を取り、一部始終を報告書で提出している。	利用者の中に公的扶助を受けている方がおられ、市と連絡を取り合っているほか、ホームの行事への参加を呼びかけている。また、運営推進会議に、広域圏の職員が参加されているため、開催時に困難な事例の相談や、疑問点を質問するようにしている。	
6	(5)	身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	一時期、早朝に玄関の施錠を実施し、外出を防止していたが、現在は夜勤者の接遇力もアップし、また、早出勤務を実施するなどして拘束をしないケアに取り組んでいる。	2階建て(居室は全て2階)であるが、事務所が居室の出入り口の場所にあるため、確実な見守りができるようになっている。転倒の危険が高い方に対して、なるべく拘束せず、かつ安全面を重視するため、高さが調整でき介助しやすい電動ベッドを取り入れた事例がある。	
7		虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	威圧的な態度、命令的な言葉づかいも虐待になると機会あるごとに指導し、防止に取り組んでいる。また、1月17、18日両日に虐待防止の研修会へ参加を予定している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度を理解している従業者は3人程度で、学ぶ機会もほとんど無い。入居者6人は、その家族等が管理しているが、2家族には、成年後見制度を紹介している。		
9		契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分な説明を行い、理解納得を図っている。		
10	(6)	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議には、利用者やその家族も参加してもらい、運営に反映させようとしているが、なかなか意見が出て来ない。	家族の面会時、意見や要望がないか尋ねるように努めている。利用者からは代表者へ直接言われることもあり、改善に向けて努力している。昨年12月からは「さくらの里だより」を毎月発行し、より開かれたホームとなっている。	今後はさらに利用者・家族からの意見を表せる機会を増やしていくため、意見箱を玄関に設置する方法や、積極的に相談できる場を作ることで、更なる質の向上に繋がることを期待したい。
11	(7)	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	連絡帳をフルに使い、施設にとってどんなに不利なことでも記帳してもらい、意見を吸い上げるようにしている。	毎日、職員それぞれが職員間で申し送りたい事が細かく連絡ノートに記載され共有がはかられている。シフトの関係上、直接話すことが難しい場合もあり、詳しい状況を伝えるために写真の添付も行われている。	現在は運営推進会議の中で、日頃のケアに関する話し合いが行われているが、リアルタイムで話し合うことで職員の日頃の意見を聞く良い機会になるので、新たに職員のみでの職員会議の開催が望まれる。
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	精一杯取り組んではいるが、入居者6人の介護報酬では満足いく給与水準かどうかは疑問である。少数入居者施設の介護報酬をアップして欲しい。		
13		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	必要と思う研修は、なるだけ受けようとしている。また、新聞や本、テレビなどの題材を利用し、介護者の心の面の研修を施設独自で行っている。		
14		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	施設長は介護保険制度の前からグループホームの運営に関わっており、その関係からも古くから親しくしている同業者が複数あり、問題点を持ち寄りながら話し合う機会は多い。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		<p>初期に築く本人との信頼関係</p> <p>サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている</p>	出来る限り本人様の言葉を傾聴し、安心が確保できるように努めている。		
16		<p>初期に築く家族等との信頼関係</p> <p>サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている</p>	出来る限りご家族やご親族の意見を傾聴し、関係づくりに努めている。		
17		<p>初期対応の見極めと支援</p> <p>サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている</p>	急激な環境変化があるので、安心して入居生活が出来るよう対応している。		
18		<p>本人と共に過ごし支えあう関係</p> <p>職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている</p>	借りている畑で野菜を作り、それを施設に買ってもらったり、また、食事後の後片付けを手伝ってもらうなどしている。		
19		<p>本人を共に支えあう家族との関係</p> <p>職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている</p>	入居者の生活歴を考え、その方なりの絆が確保できるように生活状況の報告、面会宿泊の機会を確保したり、介護計画について話し合ったり援助をしている。		
20	(8)	<p>馴染みの人や場との関係継続の支援</p> <p>本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている</p>	入居者に尋ねても、「いいです。」との答えで、馴染みの人や場所との関係が途切れないように支援しているとは言えない。	入居後、今までと同じような関わりを継続することは難しいと思われているが、できる限りの支援が行われている。例えば、以前通っていた美容室、家族支援による墓参りなどがある。また、昔からの利用者の友人がホームを訪問することもある。	
21		<p>利用者同士の関係の支援</p> <p>利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている</p>	一番弱い体力能力の入居者を、残る入居者がかわいがるなど自然にできあがっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	一人退所者が居たが、関係はすでに途切れってしまった。		
<b>その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	基本中の基本であり、当然のことである。	入居前に基本情報として、利用者・家族から情報を収集している。入居後も随時、アセスメントシートへの追記が行われている。ニーズをより把握するため、家族からの聴取だけでなく、利用者の行動からも読みとるように努めている。	
24		これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	基本中の基本であり、当然のことである。		
25		暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	基本中の基本であり、当然のことである。		
26	(10)	チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご家族や親族からは、入居時や集金時などを利用して、入居以前のサービス提供機関にも状況に応じて情報を提供してもらい対応している。	現在、ケアカンファレンスの開催はないが、連絡ノートをフルに利用し、利用者の様子をより明確にすることでプランの見直しへ繋げている。モニタリングは基本的に3ヶ月に1度だが、必要時はその都度行われている。	職員全員でもう一度、利用者一人一人が何を望んでいるか話し合われることが大切であるので、ケアプランのサービス内容をより具体化し、日々のケアに反映させるとともに、記録の見直しにも期待したい。
27		個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録や連絡ノートに記入し情報は共有しているが、それが必ずしも100%活かされているとは言えない。		
28		一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	今年から、「島原半島の観世音三十三霊場巡り」を実施しており、長期的計画や目標を立てている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	散歩やドライブ時に公園あるいは景勝地、歴史的な場所を利用するくらいで、他施設を資源として利用することはない。		
30	(11)	かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医を替える場合は、本人及び家族に理由を説明し、納得が得られてからにしている。	入居後、基本的にかかりつけ医の変更はないが場合によっては利用者・家族の同意を得て変わる場合もある。受診支援は主に職員が行い変化があった際は、電話や面会時に家族へ報告している。	
31		看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	当施設には質の高い看護師がいるにもかかわらず、尊重が足りず生かし切れてない。		
32		入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院は、医療機関が決めること。その指示に従っている。		
33	(12)	重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	医療股間の指示と、家族の意向に任せている。	ホームとして看取りの指針を定め、家族の同意を得ているが、現在までにターミナルケア及び看取りの実施はない。以前、看取りについての話し合いを運営推進会議にて行うが、結論までは出せなかった。	ホームの現状を踏まえ、職員全員でもう一度、事業所ができる支援方法を話し合われることが必要であり、協力医との連携、職員教育、家族への意思確認方法など今後の体制づくりにも期待したい。
34		急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は心急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	医療古今への素早い移動を中心に考えている。喉に詰まらせた場合は、初期対応を心がけている。		
35	(13)	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防訓練を1年間に4回実施し、隣の方や自治会の方、地元消防団にも協力してもらい地道に築いている。	災害対策にはたいへん力を入れており、年に4回消防署立会いのもと火災を想定した避難訓練を実施している。訓練には隣近所の方や地域の消防団の参加もある。来年度は日中2人、夜間(代表者夫婦も含めた3人)を想定した訓練も予定されている。	今後は火災だけでなく、地震や風水害など様々な災害に備えた訓練も必要であるので、備蓄品の充実(飲料水、非常食、オムツ等)と持ち出し品(個人ファイル等)の準備にも期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	従業者全員が必ずしもそうしていたとは言えないが、11月の推進会議で指摘して以来、少しずつではあるが直りつつある。	利用者に対する職員の気になる言葉かけに対しては、気づいたら注意し合うようにしている。今後も職員の質の向上のために内部での勉強会(心を磨く研修)に力を入れていきたいとされている。	
37		利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	「現在の生活は楽しいですか。」「何をしたいですか。」等をケアマネジャーが、希望の把握に努めている。		
38		日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員側の決まりや都合を優先することが多い。特に、入浴や外出において顕著である。		
39		身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	「持っているのだから、あれを着たら。」とか「こっちの方が似合うよ。」等は結構アドバイスしている。		
40	(15)	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	準備や後片付けを協力してもらったり、メニューは何がいいか聞いたりしている。	献立作成や買い物は職員が行っているが、できる範囲で食器洗いを行うなど残存能力を生かした支援がある。利用者によっては自分のペースで食べることができるよう自室で見守りながら摂取してもらう支援もある。ホームには畑もあり、去年はじゃがいもや茄子などたくさんの収穫があり食材としても使用された。	
41		栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	普段の食事量や好みの把握をして各自に応じて提供し、栄養について話をしたりしている。水分摂取量についても、各自に応じて対応している。		
42		口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自分で出来ない入居者に対しては、必ず職員が食後に実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	昨年、オムツ使用量を前3ヶ月対比今3ヶ月で半減に成功したら「7万円賞金を出す」としてオムツ大作戦に取り組んだ。半減はなかったが、トイレ誘導が増えたので、3万円を支給した。今後、積極的に取り組む。	なるべくオムツに頼らない自立に向けた支援として、日中はポータブルトイレではなくできるだけトイレへ誘導するため、利用者一人一人のサインを見逃さないようにしている。	
44		便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	2日間も排便が無ければ大騒ぎになるほど、取り組んでいる。		
45	(17)	入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	施設の方で曜日を決めており、必ずしも個々に添った支援をしているとは言えない。	一年を通じて、週に2回の入浴支援が行われている。利用者希望により、可能な方は安全面を配慮しながら見守りのみで入浴している方もいる。1階にある風呂場は大きな窓があり明るく、たっぷりのスペースでゆったりと入浴が楽しめる。	
46		安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	基本的に、一人一人の自主性に任せているが、衣類や寝具、場所や気温等その方に応じ調整をしている。		
47		服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	ゴミ箱を見たり、服薬後の袋を回収したり、それを写真に撮って神経質すぎると思われるくらいに取り組んでいる。		
48		役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一所懸命に取り組んではいるが、毎日とか、一人一人に添っているかと言えば、必ずしも言えない。		
49	(18)	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	今年、「島原半島観世音三十三霊場巡り」を企画しており、一番霊場の江東寺観音には参拝を済ませた。	今年から始められた霊場巡りは、利用者にとってもたいへん好評で毎回楽しみにされている。日常的な外出支援としては、ホームの周辺を本人ペースで散歩したり、買い物など個別に応じたケアが行われている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	所持できる入居者には所持させ、出来ない入居者の分は預かって、使うことの大切さも指導している。		
51		電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話は、自由に使ってもらっているが、1人を除いては、あまり使用していない。		
52	(19)	居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	浴室も含め全館に空調を整備しており、快適に過ごしてもらっている。玄関にはソファを置き、常に季節の花を生けて楽しんでもらっている。	2階建ての元ペンションをグループホームとして使用している。2階に上がる際は、昇降機の利用ができ安全に移動できる工夫がある。また、リビングはやや狭いが、ソファを設けゆっくりにつるげる場所がある。	
53		共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂や事務所、居室で気の合った入居者同士で談笑されている時は、他の入居者の動きに注意している。		
54	(20)	居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた物や、好みの物は、ローソクやマッチ等の火の気は避けてもらっているが、後は制限しないで持ち込んでもらっている。	居室のそれぞれにいくつかの窓があり、そこからの眺めも最高である。暖かな陽射しがさしこみ明るい。スペースも広く、家族の宿泊はいつでも可能である。また、居室は、利用者思い思いの物が多く持ち込まれ落ち着ける環境がある。	
55		一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	廊下に手すりを付け、トイレも利用しやすいように把手など工夫しているが、一階へ降りる階段部分に転落を防ぐドアなどの装置がない。		